

布哇（夏威夷）の物言ふ花

高田 友

布哇王朝末期に人をして魂を銷さしむる絶代の佳人ありき。名をカイウラニと言ふ。

一八七五（明治八）年の出生にて、第七代カラカウア国王および第八代リリウオカラニ女王（アロハオエの作曲を以て知らる）の姪なり。而して誕生間もなきにカラカウアの養女となる。

この人、父はスコットランド人。世に屢々見るが如く、美形の混血兒なりき。

齡十四に及びて、王命に據り英國へ留學す。滯英の間に、養父なる國王崩御し、王妹リリウオカラニ即位して萬機を統ぶ。於是、カイウラニ、叔母より「皇太女」に指名せられたり。

才色兼備全土に名高き人なれば、即位したらむか、後世に如何ほどの名を残したりやと惜まるる處なれど、已哉、母國亡國の悲哀を味はふに至りて、好き折に恵まれざりき。

一八九三（明治二十六）年、米國に煽動せられたる白人系クーデタ出來し、布哇王國は滅亡、リリウオカラニ女王は退位の餘儀なきに至る。此時、カイウラニ芳紀十八、英國より米國へと飛び、クリーヴランド大統領に會見を覓めて其の非を鳴し、聽て新聞記者連の前にて米の干涉の不當なるを訴へたり。いづれもいづれも解語の花の朗々たるスピーチに感嘆せざるはなかりけり。米國輿論は悉皆カイウラニに蠱惑せられたり。

思ひきや、この演説の功を奏したるがゆゑなりしか、一旦退きたるリリウオカラニ復辟するを得たりと雖も、再び白人住民の陰謀ありて、年内に布哇共和國の成立を見る。

カイウラニ、米國に留まること四年、一八九七（明治三十）年、布哇に歸國す。英國留學に出立せしより八年を閲してありき。ホノルルの港に降り立つや、歡迎の住民埠頭を席捲して、米國官憲は暴動の虞ありと驚愕せしとの由。

已にして王制廢せられたりと雖も、布哇輿論の王女に囑望する所甚だしきものあり。

然、而、天は布哇を見棄てたりしや、歸國して二年を経たる一八九九（明治三十二年、乗馬の最中に暴風雨に遭つて傷寒に罹患し、快癒することなく、早世して畢んぬ。

その前年、一八九八（明治三十一）年、布哇共和國は米國に併合せられてあり。

カイウラニいまだ五歳なりし砌の一八八一（明治十四）年、伯父にして養父なるカラカウア王、我が皇朝を訪ぬるありき。在任中の外國元首の來朝は此を以て嚆矢と爲す。

カラカウア王、國內の執政は世評芳しからず、亡国の種を蒔けりと雖も、外交政策は極めて進取の気性に富み、海外訪問數多度あまたたびに及びぬ。在任中のグラント米大統領、ヴィクトリア女王、ローマ教皇レオXIII世十三杯なむと會見を重ねたりき。

本朝來訪のりには、明治大帝に謁見を賜はる。これを機に、王はカイウラニ王女を日本皇族に嫁がしめむと欲して、其の旨を奏上す。剩へ、王は準備萬端怠りなく、山階宮定麿王十三歳まる（後の東伏見宮依仁親王よりひと）を指名して、姪を此れが宮の妃たらしめむと畫策せり。大帝は維新直後なれば、かかる餘裕無之これなしとの口實にて認諾したまはざりき。

大帝の拒絶したまひしは、布哇を輕んじ給ひけるには非ず。若し縁談成立あらむか、米國の不興を買ふの虞あるを憂へたまへるなり。

此の人、日本皇族となるを得たらましかば、その人心を得たりけむ儀、如何なるものかあらましと惜しまるる所以なり。

カイウラニの寫眞今に遺るあり。寔まことに洵まじに瞠目せらるる玲瓏の人にして、加へて凜然たる氣品あり。

才色兼備なるのみならず、其の多藝吃驚すべし、十五歳の砌に描きたる油繪の巧みなる、インタネットにて見るを得。

王國存亡の危機に瀕して、此が解語の花を女王に擁立せむとの動きありしかども、伯母なる女王嫉妬したりしや、顔色澁くして拒絶の氣配ありき。カイウラニ、伯母と確執あらむを惧れて、即位を肯ぜず。即位したらむか、あるいは布哇王國の命運、異なる所ありけむとぞ悔まるる。

玉膚花顔、櫻の如く満開にして天折す。怎いかんが恨まであるべきと涙催さるれど、華麗にして平穩なる生涯を送るを得たるの儀、自らは怨念なくして歸天したるにあらざや。

（令和五年十一月二十七日受附）